

三宅島ふるさとだより

No. 34

平成25年1月1日 三宅島ふるさと再生ネットワーキング東京事務局 TEL 03(3963)5678 Fax 03(3963)5697
住所: 〒173-0005 東京都板橋区仲宿25-6 あすなろ福祉会内

東京 三宅 新千 厚賀

2012年(平成24年)11月30日(金曜日)

弱者に目向けて

◆東武東上線沿線で飲食店を営む板橋区の安部昌之さん(70)は「石原さんの行動力は評価するが、オリンピック招致や尖閣問題では、都民や国の意見を聞いてほしかった。途中で都政を投げ出したのも残念」と首をかしげる。店では500円ランチを提供し、夜遅くまで営業する。「生活に追われている人を大勢見る。オリンピックで経済を活性化したいのは分かるが、次の都知事には弱者にもっと目を向けてほしい」と訴える。

若い人に活力を

◆文京区の東京メトロ江戸川橋駅近くに事務所を借りるネット関連会社社長の植野寛洋さん(39)の前知事への評価は高い。東京マラソンや臨海副都心開発を挙げる。「新銀行東京など失敗もあるが、歯に衣着せぬ言動は今の社会に必要な政治家」。新しい都知事には「密室で決めるのではなく、肌を感じられる情報発信と行動力を求める。取引先が相次いで力尽きていく。起業家や若者にもっと活力を与える政策を」と期待する。

外国人の訪問増

◆再建中の新銀行東京や、五輪招致といった政策を「ずいぶん税金を無駄遣いした」と批判するのは、中央区の会社員佐藤佳子さん(46)。ただ、石原都政は功罪相半ばしたと感じており、「東京マラソンや羽田空港の国際化で町は華やかになった」と評価する。後任には「石原都政の良かった政策を続けて、力強い都市にして、国際化を進めてほしい。もっと外国人が訪れるように」と観光政策の拡充を求めた。

住宅再建支援を

◆2000年の噴火で全島避難を経験した三宅村の神着老人クラブ会長佐藤就之さん(77)は、前知事が帰島する住民に「自己責任」を強調したことが印象に残る。復興策としてバイパスが始まったが、観光客数は低迷し、島民数も噴火前の水準に戻っていない。佐藤さんは、新知事への期待として「帰島しようにも個人の住宅再建に補助がなければ難しい。村の再生のためにも住宅再建への公的支援を充実させてほしい」と述べた。



「ポスト石原」 何に期待する？

石原都政の継承か転換か。都内の有権者に「ポスト石原」に何を望むか聞いた。

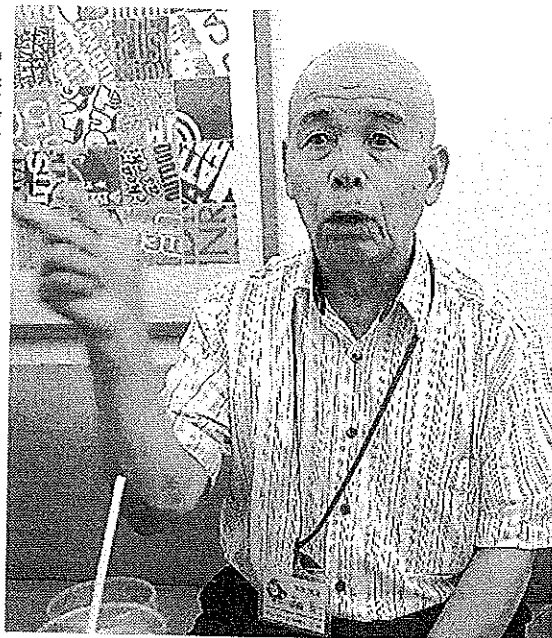
首都のかじ取り誰に

見回り、独居97歳救う

異変に気づき近所で連携 江東

助けを求める間もなく急病に倒れた独り暮らしのお年寄りが8月、江東区で救われた。独居高齢者の見回り活動に取り組み夫妻と、近所の人々の連携プレーが一つの命を守った。

「最近、女性が弱ってき 都営アパートに住む女性
ていたので、もしや、と思 (97)を訪ねた。呼び鈴を押
った」。東雲2丁目の元会 しても応答がない。別の高
社員、須藤栄二さん(75) 齢者宅を訪問し、30分後と
は、あのかきを振り返る。 1時間半後に再び足を運ん
8月17日午前6時半ご だが呼び鈴は空しく鳴るば
ろ、いつものように近くの かり。新聞受けには16日の



「(高齢者の女性宅を)何回も訪ねてみてよかった」と話す須藤栄二さん(江東区)

「さらに改善」緊急連絡態勢「の嘱託訪問センター」

夕刊が残る。自宅に戻って電話してみたが、やはり誰も出なかった。

午前10時ごろ、妻の静子さん(74)を連れてまた戻った。2人から知らせを受けた近所の人たちが台所の窓から部屋の中をのぞき、居間で倒れている女性を発見。救急車を呼ぶとともに、長女の川北公子さん(70)「同区大島2丁目」に



女性の救出に協力し、11日に感謝状を贈られた須藤さん夫妻(右前の2人)ら近所の人たち(江東消防署提供)

連絡した。女性は救出中に意識を取り戻し、2週間入院。いまは川北さん宅で療養している。

川北さんによると、女性は夫の死後、「自分の面倒は自分でみる」と言って約25年も独り暮らしを続けていた。倒れたときのことを「転んで気を失っていた」と話しているという。

住民と連携して女性の命を救った須藤さんが、区シルバー人材センターに委嘱され、独居高齢者の「声かけ訪問」を始めたのは昨年からだ。

2010年の国勢調査によると、区内(現在の人口約48万人)の世帯のうち65歳以上の住民は8万5872人で、その4分の1近い2万5811人が独り暮らし。

このため、区シルバー人材センターは5年前から希望者を対象に「声かけ訪問」事業を開始。須藤さんら約80人が約400戸の独居高齢者宅を週3回、訪ねている。

ただ課題もある。

訪問者がお年寄りの異変に気づき、救急車を呼んだケースは今年に入ってこれで3件目だが、他の2件ではすでに死亡。命を救うためには、より迅速な対応が求められている。

無事救出したとはいえ、須藤さんも「女性の異常をだれに伝えたらいいのかわからず、慌てた」と話す。

今回のケースを教訓に、人材センターの富所事務局長は「センターや区の福祉担当者など緊急時に連絡できる電話番号を訪問者に配り、もっと素早く対応できるようにしたい」と改善につなげる考えだ。

江東消防署は今年11日、須藤さん夫妻ら住民7人に感謝状を贈った。

川北さんは「今の時代に珍しい近所の人たちの連携プレーがなかったら母は助からなかった。母も『元氣になったら須藤さんたちにお礼を言いたい』と言っています」と話した。

(四倉幹木)